



猿蓑

乾

~ 5

1374

1



利
1.374
卷



晉其角序

非謂乃集つる事古今より
たつらそは道におよびて起通
き時たつれや切術の事一
しそそれ白り魂を入る道
そゆえよ極めしむに似る
ゆゑ久しき世よそそり
まゝんようりてそそ友た家

をち〜じ五徳ハツルよ及ん
ゆらんを〜ゆ通さぬ〜た
こたり彼あり上人の骨より
てんを作〜〜〜詳い地
多る笛を吹やうになん結る
と〜〜地分る人よ〜成て清道
ゆ〜五の詳のり〜〜〜は
反魂乃法杖を〜〜〜〜は
〜〜〜

屋はま〜したあり〜るれ入〜
〜パイウエツ〜〜〜
い〜〜吟詳〜あぬ通
〜只離踏も魂れ入〜
〜〜〜我翁行脚乃〜
字加考哉〜〜山申〜
猿〜小養を看せ〜離踏
乃神を〜〜〜今地〜

いまも新賜のむらゝんを呼
ひも神あつてに懼るへまの
術なりこれをえうてし
集をつらうて猿之のい名
付かりは建ちあふ是の序を
てんをうり魂を合せし去来
元兆乃ほりもたるとよまうて
書

猿蓑集卷之一

冬

初一に猿を小蓑をほりて也 近藤
あまのついでを時をまゝに夜は鐘の
時をまゝにまゝにさるる鳥の
幾人か一に猿のぬぐもついでに 僧 丈艸
徳持の行振るうに一にまゝに 正秀
度限やいりり時をまゝに 史邦

かよけを延びたての冬をよむ 凡兆

いよよ

掉尾のこまあり外は杜若のれ 伊賀 大七方

流杯をたもめて通る十絶外 膳所 裾道

ちののれやけいふくあはる女 伊賀 越人

このしほ茶あふゆよおきり 伊賀 猿籠

古ちの賀子も事しをいふ 凡兆

公羽の密田の家始をいふ

雑水のかこりなすは冬さもり 其角

このきき牡丹のよれ名も裸 伊賀 車来

草津

あはるさひうらみのこり 尚白

神逆水にうらりうらり 珍碩

霜月朔旦

揺らりあよ物あり 伊賀 良岳

水き月れあを 羽後田 不王

今世よむのこころはかきかき

尾張 且葉

尾張のこころをいふは海風

去来

一徳くしむはあや釣干茶

伊賀 探丸

こらこらに又か賀は音井のき

尚白

茶海くくくくくくくくく

口戸 龜翁

炭竈よる子肩杖の倒き

允兆

住つぬ猿のころや赤火燧

芭蕉

寝ころや火燧蒲團のころぬ

其角

内前小室もあふぬを至

尾張 允兆

本龜也地をい切る屋は雨

伊賀 菘境

こころの眼もやれをさうし

伊賀 半殘

貧交

まじりては子れ切を譲り

大州

浦風や巴をくすし

曾良

あゝ儀やいりて列る友

去来

根のめと踏浦や濱千鳥

史邦

背門口乃入江よのぼるちきり
 いし道々雪よまきいて鳴子雪
 矢田のおもや浦のあつたよあつた
 筏とれたんへる跡や鷺のち
 水と魚とまてまて魚の小鴨舟
 ろんも寝入るわら余吾の海
 死して探成らん鷹はんか
 襟をとり首引入る冬れ月
 丈州 千那 元兆 本節 丈州 路通 貝葉 秋風

天本戸や鎖のまけて冬れ月 其角
 かゝるに浦園いりやみのか 暮年
 又やまゝし旅人ふり 石部山 智厚
翁は御代もいふをよまへ
 らる記あり略く
 首をすてらつちきりやけ食 竹戸
義濃

題竹戸之食

魚のけしき乃やせがきと秋や 探丸
 魚のけしき乃やせがきと秋や 探丸
 魚のけしき乃やせがきと秋や 探丸

志のこゝに教珠の玉の守網袋の 史邦

白砂の候す

藤つとよかしくまらりたての 史邦

桜摘の急な敷を狂ふあり 野童

鶺鴒乃鶴よりこぼす 伊賀 示蜂

呼ぶよと舞賣さんおあられ 九北

こころれ津よりや朝飯の世 膳所 晝好

いづちち内よ居たりぬ人 其角

初雪よ鷹部屋のうく 史邦

おれやひのふは吹くやも 羽紅

ちいさな子あひね 探丸

下京ちちのじよはな 九北

はなとこしん 同

信濃路をよる

ちちらふや穂屋の 道産

草の庵の宿

表老の公座もあつて巻れり
其角
ちた目ハ竹の子さうはうり
尾張 羽立
許よも健あつてさうれり
長崎 卯七
いひさけこちやを喰ひて
去来

青亞追悼

乳のこみに世を渡りし師
尚白
うゝ舞もこを也の慶をされ内
芭蕉
餅うじ糖ハ影ハ似ぬとも
乙卯

一月のあまきりてしらすのよ
文州

住吉奉納

夜神系や鼻息白く角の内
其角
節季候よ又のこしき事しれ
伴賀 須玖
あつてらひやしきし
同 祐甫
排

乙卯、新宅として

くよ家系をさうせり
芭蕉
弱法師、家門ゆき餅のれ
其角

歳の夜や曾祖文をゆけふ多枕 長和

うす望れしそらあやうの者 去来

とまてけり年娘のけし伊勢の 同

大とちやまはまきつるくもん 羽紅

やりとけり又やうしん年取の者 其角

い孫のくまのしん年け暮 路通

年つら我破も禱は幾くあり 松風

猿蓑集卷之二

夏

有明の面はとすやに 其角

夏にすこもるに 木帝

おを横よし 芭蕉

おきりく 尚白

けいけい何も 凡兆

しんはちさのしんす時鳥 智月

蜀魂たぐやあつた角搦 史邦

入おれしつゆの中やにきぬ 羽紅

ほろろの涙ふりかゝるあつたれ 丈艸

んちうと代官殿やほろろす 去来

こし死に我塚にあけちうよひ 遊女 奥刃

松橋一見の時ちうよひもや 曾良

去鴻やちうよひをさるれほろろ 道隆

うもいぬまはらうかゝせよかんとす

旅館庭にまうく
庭草をとえんす

月桐葉うらよ海をこけり 膳所 曲水

四月八日詣慈母墓

あはれうらうらうらうら 其角

系うたれぬる記を牡丹の葉に 江戸 全峯

別僧

しるしあふ心やこゝろよ来囊花 越人

ちうよひのこゝろよちうよひのこゝろよ 珠碩

高は依らねてしよまよふ

似合しよけしつうちの里

亡人 杜國

まふまふ句おけしつうのま

嵐蘭

井はすまふしつうしつう

本殘

起ぬくゆまふまふ

船の回乃

起くのまふまふしつう

仙化

題去来之岨峨洛柿舎る

馬極る如の本色屋を名起す

九兆

破垣やうしつう麻子たがし道

曾良

南都旅店

誰のまふまふしつう乃園北柯

千那

洗濯やまふまふしつう返移のま

尾張 薄芝

豊國よて

竹の子た力を得るまふまふ

九兆

まふまふ子や白田勝るしつう

去来

たけのこや推すまふの得るまふ

芭蕉

五月あよ家あり控てありて
凡兆

ひ孫妻又味なもやわり
木節

了士の謂はれありとて雨
史邦

奥品名取の郡よ入く申物家
の塚ハつてくやと存物
道より一里まゝなりなり乃方
笠物といふもよるとも
わつてまゝも五り
ちよくす

道徳やいつこみ
芭蕉

大和紀傳のこい
て住まの形れを
紙のこい

つくりもい
去来

髪利や一夜よ今情
凡兆

目の道や養
芭蕉

待地や
羽紅

七十余の老醫
にいふ人の
いふ人
の人は

けし年よころとこころ
ゆきさうりらとこころ

六月七日おとくや五月あか 其角

百姓もまよと取つく茶摘可 去来

志くくまや茶くくくまぬつれ 正秀

つみ合子るれけけやま白鳥 照所 游力

孫とと愛くく

妻共余の家くくやらん雨蛙 智月

まをくくくくくくくくくくく 江戸 花紅

まくくくくくくく

月流のくくくくくくく 道徳

出羽のくくくくくく

胃掃をと面新くくくく粉のま 風

法隆寺用帳
南無佛のた子を拜す

河袴のくくくくくくく 千那

回の臥れくくくくくく 伊賀 万宇

膳所曲水之樓くく

堂火也吹らばはまらし風のたこ 去来

坂田乃曇りん二句

闇の夜や子を泣かす曇り 凡兆

いよるや船頭酔てははつれ 芭蕉

之熱野へ清きまのり

堂火也こゝろふりまは思尾谷 田上尼

あれらよ精とどちあふぬ 尚白

草むしや百合の中こゝろの白 半銭

病後

やうちかかいららうく、百合のふ 何処

すいゆかあらりせよ百合の花 乙卯

蟻蚊群を作ると

子やいらん其子の母を蚊の喰ひ 山嵐

餞別

ちとすや蚊屋もくわの蚊の宿 里東

あつたふん
集書下巻 送者よめい

膳所

「芥」の「夜」を「昔」の「冠者」より「み」か
其角

清のや空のきくは耳乃乃宛
文州

下等や地味なうの蟬のき
嵐雪

客よりや片指交かゆる野のき
探志

行くのぬきうりまうんます野のき
芭蕉

表さや音麻州さあめし海
槐市

渡り舞、蓮のきあう流哉
元兆

舟引のきか唱音、合歡の花
于那

白雨や鐘よりくも日た夕
史邦

素堂之蓮池邊

白るや蓮一枚の拾りてま
嵐蘭

日焼田やあくくく鳴く蛙
乙幼

日乃田着と鹽の底に蟻くれ
元兆

水を日と鼻つとあまの殺き全
因

目の曇りこりぬき果をこ半付台
正秀

きく果る、籬よりけ發のき
末節

志りんふの教めくはうあしし 野童

のろくろくろくろくろくろくろく 羽紅

青草の湯入ふふふふふふふふ 巴山

千子のあまのりりりりりりりり

きりりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりり

何れ!

子さくめ小袖を今や春用干 芭蕉

水玉目や朝りくちぬくもくも 嵐蘭

志りんふの教めくはうあしし 宗匠

十は中朝子いふは何しは 元飛

辰より雲つゝく思ふよもももれ 千那

月鉾や思乃家純應糖 曾良

夕ふもや岬並しふもふもふも 去来

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

やあふふふ今のち比敷よあふ物 大坂 之道

猿蓑集卷之三

妹

梅月や蓮花しるよ花一

此句東武よりきし

まゝ素出望

かひくちのめけおの齒也秋の風

芭蕉居少何よおれや妹の風

人よ似く様もまゝと廻結のそ

不知  
讀人

秋風

路通

珠願

加賀乃全昌寺に宿す

終夜枯竹きくや意の心 曾良

芦原や野馬の寝ぬおを蜂の風 山川山戸

あまのそらや鬱合留汁枯の心 凡兆

しづかや務の所まの起あらし 去来

大比叡やしづかおと葉のたゆまじ 野童

と葉らりて跡とあねまや桐の雷 凡兆

文目や六りもまたの夜よみ似す 芭蕉

合歡のよみれあらしのいよ思あけ 同

七夕やあまのいづるはるる物へし 杜若

こやこよの信よりくさり相撲取 去来

朝のぼるま露眠るあらしのし 風姿

思舞やあまの苦受代にみまじす 及肩

笑もの泣かそよまはま権りし 嵐蘭

まぢあまのけしきくさるし木権か 秋風

ふるたれしそたけしきねられ 千那

續二 歌

よきものゆくぬめあききや殊巖雨 史邦

そよよか藪の田よりおあし 豊稔

秋風やよきの風入るこころす 子尹 <sup>三川</sup>

逢い子の親あつらやすきあ 羽紅

ハ瀬おりに遊びして榮 <sup>ふりの文をけりる序あま</sup> 元北

まきく楊乃んげさゆりし <sup>つらつらおせにかて</sup> 去来

思ふよのこころ <sup>つらつらおせにかて</sup> 去来

草刈より地を思ひし秋のお路 李由 <sup>平田</sup>

え禄二年翁は伏せしきて  
こちのくもり三越後よちり  
り軒しきよかの國よて  
いかりゆりていせもてえ  
とらら

いつくよきたよれ跡も秋のま 曾良

桐のまにうらつらぬの心 色彦

百舌鳥あや入日さし女松系 元北

初序より燈をいしまふ <sup>亡人</sup> 落梧

長  
一  
一

田田

病馬の疾としばしあつて病の 芭蕉

海老の如きと海老よまの 同

加賀のふきとふき又田乃  
神社の空物とてふ文  
うきうき草乃乃よとて  
錦のふれもをさす事な  
うきうきのわたりははは

いんや甲のふれきりくす 芭蕉

采白や二ふれ申の虫は 尚白

いんや甲のふれきりくす 風寒

いんや甲のふれきりくす

葉月や冬鶴よはる人 千子

こころ月に養魚のめりて 之道

粟稗も月出なふらぬ 半残

月えせん伏見の鶴乃 去来

翁をさす会よあつて

ばさうう松笠のふれ 土井方

伊賀





月入るる人の破よんりう 羽紅

僧正のいよのふ屋れをぬり 尚白

和歌や鳴つのはの飛舟 凡兆

一戸や衣のやうこましく 去来

釋の抱はる遊 越人

徒糟やわづかの食より荒島 正秀乃

あやまちてきこう地をの鎌 嵐蘭

一鳥不鳴山更幽

物の音らりたり 葉よみ 凡兆

しつしき抱よみん 曾良

旅枕庵のつまを軒下 千里

鳩よや浪柿の蕎麦島 环碩

とけや下るや 凡兆

鱗釣はもろし 半残

わあ間のしすぬり 尚白

葉を切る跡 兵角

了たると鷗ヒナの鳴き声からまれ 珠碩

よのひのやのこころの輪は秋 土芳

稲うゝ母よ出立ぬがあはれ 凡兆

自題落柿舎

梅めしや梅さくらもあはれしと 去来

志し遠かゆしと梅のしるはる 塵生

肌とし竹切ふのしるはる 凡兆

神田みよ



さくらさくらしるはるの梅もあはれ

神田みよの歌うしるはる 数足

梅さくらあはれしと

花すも大なるをさくらさくら 嵐雪

しるはるの五日弱るすもあはれ 丈艸

立すも花の夕や月个し 凡兆

世の中、鶺鴒のさくらしるはる 同

培臭けさくらさくらあはれ 荷分

猿蓑集卷之四

春

梅咲て人の怒乃悔もあり

露沾

上臈の山莊より

候し

梅よりや山路隔入ん

去来

しん香や久入異半の角

句空

庭真

梅よりや山利も流す谷真

土方

つづつ蝶を虫身やまきまき梅のふ 半残

梅の香や酒のつづつめいほし 膳所 蟬用

しあいのふやけ一筋を路のたう 其角

子良銀のほよ梅もよひ

梅子良子れつとつ梅のふ 色焦

瘦女敷や作りたつ我の軒の梅 千那

灰捨て白梅くまじ垣縁のれ 心兆

日當り梅吹くわや層半房 膳所 支幽

暗香浮動月黄昏

へ相の梅よならり区しりき 風麦

武江よやともしく猿亭の 後山

寝ころも 乙羽

幸末のつづつ梅のふ  
つづつ梅のふ  
のつづつ梅のふ  
梅のふ  
あつた  
梅のふ  
つづつ梅のふ  
つづつ梅のふ  
つづつ梅のふ



雪やう雪一みりたきりふ 江戸 溪石

うらやふやを詠あし礼ふし 其角

鶯や下駄の齒よつく小田代止 凡兆

雪や窓よ夕ちとてとあらし 伊賀 魚日

やぬの雪を折らふしすこい 江戸 探丸

け溜はきよめ持へき柳ふれ 江戸 ト宅

垣うにうへてくれし柳の 同 遠水

いこいふ 極変れよ柳ふれ 尚白

青柳のふもれや鯉の住所 付カ 一啖

雪やけや鈴いす場乃す 同 未云

待中乃正月もてやうら月 揚水

回カ昭よつとてし

雪やうにやういふ意の橋の妻 芭蕉 芭蕉

うらやまのけいふもい切時橋の意 越人 越人

うらやまのけいふもい切時橋の意 去来 去来

雪路はなまて餘寒の膏産

青いよよ... 羽織

おのま... 尚白

出ら... 龜前

を... 嵐雪

骨... 九龍

白... 其角

く... 松峯

ま... 元志

陽... 荷う

の... 百歳

ら... 土方

い... 氷回

群... 元兆

う... 芭蕉

い... 配力

狗... 嵐雪

...

...

彼岸よりとしまの一夜におも 路通

ふのしや常代ありとて涅槃像 野水

三花並ぬ裏ハ燕乃かまひ道 九兆

まてらく今や紀の戸にのみ居 伊賀 沢維

春もぬや原のふ草ふりてあめ 嵐虎

ふりよめて

よきもやしより出るるを門 猿維

不性とる全のそ起るるを門 色維

春もぬ下田養のしに雛賣 史邦

しつゝのあまや軒よあ花 羽記

泥もぬ下田養のあめ 史邦

舞いこころの本舞の竹や思の羹 昌房

振るも下をよけよるま年れ雛 去来

まのしよいすれ雛の写影のふ 伊賀 萩子

桃御くらりありとやきんるれ子 羽紅

ふりてま境のふりてあめ 鳥巢

上

下



里人の暗暮し〜田畑、れ 嵐推

蝶のま〜一匹を寝よかり意の ほ 半残

糸鷹切く白根、嶽まの染 加初山中 挑妖

いのた〜り〜もすしや 濠 伊賀 園風

日の影やこ〜くたよの観すの 珠碩

石の鼓めむ暮のす〜や緑のえ 土芳

園の池や果なま〜う〜と〜あ〜衝 芭蕉

越らり飛浮くゆ〜と〜縁の  
つ〜のち〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

~~~~~

鴛の巢の樟の枯枝よ目〜ぬ 久兆

子〜〜〜〜〜と〜と〜と〜と〜と〜と 石 伊賀 石口

子や梅ん 餘り〜〜〜〜の〜あ〜あ 松風

い〜ら〜あ〜〜申れ拍子や雉あお 芭蕉

芭蕉菴の〜〜〜を〜訪

蓮草小 鋸〜〜〜あ〜〜も〜られ 曲水

木白筋 旅〜〜〜〜〜お〜あ〜あ 山 江戸 山

畫譜

山吹や夕日の培がけ白く晴

芭蕉

白玉の雪あよまづつく梧の如

車来

十のこころをいふは
あちぢれの髪りつゝんもあ
しらゝとこしやま

竹井まがもくしを昔やちり梧

羽紅

鴨中折しよとくしつゝんもあ

坂上氏

津國山本

うきよの雪はらゝゝも梧の 芭蕉

しらゝとくしつゝんもあ

利雪

東叡しよまゝうぬ

小坊まやまらあしつゝんもあ

具角

一枝のやゝあはらゝゝ

尚白

雛のおもひあはらゝゝ

凡兆

まゝえよらゝゝ枝あゝんらゝゝ

丈艸

も月のしらゝゝあゝんらゝゝ

史邦

あゝあゝしらゝゝあゝんらゝゝ

千那

道灌山よのこころ

る清やまきさくのびをひらけ 嵐蘭

源氏の強きとく

標子に夜ちるふれをうらむ 羽紅

二庚午の歳家を焼く

後よりちりしきよの夜はらりし 北枝 ^{加品}

しめらるや加藍の櫃やうけ 凡兆

海棠のしを満より夜の月 普能 ^{加品}

大和の跡乃

草同くちるよびやあめよ 芭蕉

山やや躑躅よけは屋のひら 探丸

やうらー海よらんやの由歌 智月

兔角しておまつわしはま 山川 ^{伊賀}

鷗鳥のぬすうらりてふりし歌 式之

木曾塚

真のその石よのなをたふすれ 乙羽

春風吹送香心
初望湖水惜春
曾良

望湖水惜春

春風吹送香心
初望湖水惜春
曾良

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

山

山

神野氏

